

米国における能楽研究の実態と

私の能狂言を中心とした演出活動

—一九六〇年代から20世紀の終わりまで—

アンドリユー・T・椿

I. 前章

A. 生い立ちから留学にいたるまで

本論に入る前に私の過去について多少述べさせていただくことをお許し願います。私は「三健」という青物問屋を東京の秋葉原の青果市場で商っていた、茨城県の利根川沿いで椿屋という船宿を営んでいた一家の、健という次男を父として、神田の松富町で一九三一年に四人の姉の後に生まれました。その後一人の弟が四年後に加わりました。第二次世界大戦が始まる前の一日一家揃って両国の国技館へ中国の王族を主人公にした大口マンのスペクタクルを見に行つたこと、小学校一、二年の頃に剣舞を習わせられて、剣道着を着て剣を腰にさしている写真があつたことなどを憶えています。戦争が始まってから荻窪に移り、杉並中学校に入り二年生の時に終戦を迎え四年生を終わつた後、新

制高校に移行した杉並高等学校を一九五〇年に卒業し、直ぐその春から東京学芸大学の二期生として英語科に入学しました。

高校時代に映画クラブに入り、時々ただで映画を見に行ったことがありました。もう一つその頃あった大事なことは、三年生の時に内山靖夫という子供心にも素晴らしい英語を話し教える先生が来て、すっかり感心させられて友人二人の三人で学外で英語を教えてもらうことを許され、一年ほど特別に勉強させてもらったことがありました。その時の経験が幸いして私の英語の聞き取りの力がつき、大学一年の時の先生に誉められたことがありました。その頃クラスメートと話し合い、英語の話し言葉が強くなるために英語劇をすることになり、それが成功して面白くなり、その後毎年一回ずつ続けることになり、四年生の折の卒業記念公演ではシエクスピアの「じゃじゃ馬馴らし」を上演して、私が主人公のペトルーキオを勤めました。これが私の演劇づく始まりでした。

一九五四年に卒業し直ぐ文京四中で英語を教えることになりました。そこで演劇部の世話をすることになり、初めて演出といったことも本格的に考えることになったわけです。歌舞伎座で日曜日のマチネーが始まる前に、公演月に一回中高校生のための歌舞伎教室があり、それにクラブの子供たちを良く連れて行きました。公立中学校のドラマコーチの集まりで知り合った何人かの同行の士が集まって「劇団第七」をつくり、私たちのラポラトリとしたわけです。そこで二年間八月毎に二回公演した後で私はカナダのサスカチワン大学で奨学金がもらえることになって、一九五八年の秋早く西洋演劇の勉強をするために、羽田空港を一〇〇名近くの見送り人（教え子たち同僚親戚友人家族）に見守られて出ました。その時代はドルの持ち出しが厳しく制限されていた頃でしたから、私が許されて持ち出したドルは42ドルだけでした。今では考えられないような状態でした。

もう一つ忘れられないことは、私の留学に対して東京都の教育庁が取った態度です。フルブライトとかの有名な奨学金が貰えたわけではないので、どうしても行くなら職を辞めて行くようにと言われたことです。幸い四中の校長先

生が話の分かる人で、一年で帰ってくれば席は空けておくからと親切に言ってくださいました。結果的には帰ることにはならなかったわけですが、教育庁は今でもこんな話の分からないことを言っているのでしょうか？

B. 留学時代

University of Saskatchewan, Saskatoon, Saskatchewan, Canada (州立サスカチワン大学)には、一九五八年の秋から一学年間滞在しました。英国から移民してきた二人の先生が、演出、演技そして演劇史、舞台美術と言う風に分けて教えていました。私は出されていたクラスを全部取って、更に日中は装置作りの仕事場でできるだけ時間をすごしました。私の少ない奨学金に同情した演劇科の科長教授が、毎月25ドル払ってください、科の雑用をするようにしてくださいました。雑用が終わった後の時間をシヨップ(装置作りの仕事場)ですごして、装置作りについていろいろ実際の勉強ができました。一年に二回(一学期に一回)の公演のためのリハーサルが始まると、それをできるだけだけ見て、さらに私にできるような音響効果の仕事を引き受けてそのテクニシアンとして公演にも参加しました。科長教授の要請で日本の古典演劇に関する50枚近くのタームペーパーを書き、それに黒白のスライドを40枚程付けて提出しました。今まで本格的に古典演劇についてしっかり勉強したことがなかったので、ろくに参考にする英語の資料もないところで、日本から何冊か入門的な本を送ってもらい、苦勞して何とか形を整えました。それを Drama Department (演劇科)の備品にしてくれるとの話でした。写真などの費用は全部科で持つてくれました。この分の研究結果は次の段階で修士課程の論文の第一章として再生することになりました。外国に来て初めて故国の文化を振り返りその価値を知るといふ皮肉な場面の繰り返しが始まったわけです。この科長教授の励ましを得て、米国の30程の大学に演劇の勉強をするべく入学許可と奨学金を受けられるように、お願いの手紙をだしましたが、たった二つの大学がら入学許可と助手としての地位をくれるという有難い通知があり、その時には父親がガンで秋までの命だと知らせがあったのですが、

心で詫びてカナダから米国に九月の始めに汽車で、ミネアポリスで途中下車をしてその頃まだ建築中のガサリー劇場をみたりして、三日近くかけて、テキサス州のテキサス・クリスチャン大学に移りました。

Texas Christian University, Fort Worth, Texas, U.S.A. (1959-61)

この大学は私立で宗教学校のような名前でしたが、そうしたことは個人の自由にまかされてきました。演劇科、Department of Theatre Arts は、サスカチュワン大学の科よりほんの少し大きく、教授は三人居りました。科長の教授はドイツからの移民で Dr. Walther Volbach (ボルバック) と言い、学生時代にベルリンで有名なマックス・ラインハルトの演出助手をしたことがあるという人でした。二年間科のチーフテクニシアンということで、舞台美術のコースを取っている学生が週に二回ずつ交代で、毎日二時間ずつ私の監督するラボラトリに来て装置作りをするわけです。科長先生は演劇史、演出を教え、大学院生の論文の指導などされてきました。他の二人の先生は、一人が舞台装置と演技を教え、演出もしていました。もう一人は女性の方で衣装を受持ち、児童演劇の指導演出などしていました。大きな公演は学期毎に一つずつ、それに子供のための劇とか大学院生の演出する劇とかがありました。ここでも秋と春の学期があり、夏は休みでした。このTCUではバレエの装置、ボルバック先生の演出した劇の装置をデザイン、製作をし、彼の「オセロ」に兵士として出たり、児童劇で王様の役を引き受けたりしましたが、最後のプロジェクトは三島由紀夫の現代能「葵の上」の演出でした。能のことなどは分かりませんでしたから全く新劇的にやりました。三島の現代能は能とは呼ぶべきものではないと、今では確信していますので、それはそれで良かったかと思えます。一番大きなプロジェクトは修士論文で、"Western Influence on the Development of Modern Theatre of Japan" (日本の新劇に与えた西洋演劇の影響) と題した一六〇ページ程のものでした。秋庭太郎の「日本新劇史」にいろいろお世話になりました。新劇として勝手に日本好みに訳された劇の題には泣かされましたが、幸いボルバック教授にこんな話の劇だと伝える

と、それは誰々のこれこれだとタイトルを教えて下さるといったことが何度もありました。この初めての大作を一年そこそこで終えることができたのは、ひとえにボルバック教授の忍耐強い指導があつたためだと大いに感謝しております。その頃（一九六一年）は、未だタイプライターで打ってカーボンを使つてコピーを取つたわけですから、大変でした。こいで修得した学位はM.F.A. Master of Fine Arts（芸術修士号）でした。

二夏、市の Casa Manana（カサ マニアーナ）というプロの Summer Theatre（夏季劇場で円形舞台を使用）で舞台装置作りをして、学費生活費の足しにしました。最初の夏には幾つか小さい役を貰つて舞台にりましたが、“South Pacific”（南太平洋）という有名なミュージカルにポリネシア人の召使の役を貰つて、フランス語のなまりのある英語を使うという事で、変わった経験をしました。

T.C.U.が終わる前に、是非米国の博士課程にいきたいものだと考え始めました。ボルバック教授のお世話でまた一、二、三の大学に応募しました。今回はイリノイ大学から大学の Fellowship（大変名誉な勉学援助金といったもので、基金を貰うことへのお返しの仕事をしなくてすむ）を始めとし、オハイオ州立大学と私立のノースウエスタン大学からは Assistantship（助手としての援助金でクラスを教えなければならない）を提供してくれるという話になり、何人かの様子を知っている人に相談したところ、金額が多少少なくても、フェローシップを受けるのが一番だと薦められて、イリノイ行きが決まりました。カナダの時とさらにT.C.U.での成績が全部Aといった、多少よくがんばつたという意味の大変好意的な好成绩だったのが大いに役に立った結果と思います。日本を出たときは大きなスーツケース一つに手提げカバンが一つで、スーツケースに入れた岩波の英和大辞典の重さを気にして、まだ九月の中旬と言うのに冬のコートを手につつという出で立ちでした。テキサスへ行くときはそれに中ぐらいの古いスーツケース（教授の一人にいただいた）とボール箱が二つ増えたのですが、イリノイへ行くのには一九五一年の古いフォードが、ドライバ―の席を除いて超満員になるくらいガラクタも増えて、大変なことでした。

University of Illinois, Champaign/Urbana, Illinois, U.S.A. (1961 - 64)

大学の校地が二つの隣り合った市にまたがってあるので、Champaign/Urbana といった言い方をします。アメリカ中西部の有名校の一つなので学生数も三万に近いということで、今までの経験を超越して馴染みにくい感がありました。慣れるに従って様子も分かり自分なりに落ち着けるようになりました。程度のぐんと高くなった大学院生用のクラスもあり、博士課程のためのフランス語、さらにドイツ語も読解力をつけるためのクラスを取ったりするので、忙しい毎日を過ごしました。一年目はTCUで自信をつけた舞台装置の仕事をし、二年目は"Yellow Jacket"という中国のオペラ形式を使った一九三〇年代の人気であった米国の近代劇でコーラスといつて舞台回しを勤める役をしました。今考えると、これが舞台から観客に直接話し掛けるような様式を持った劇で、歌舞伎的な演技方式を使うことを勉強させられました。最後の三年目には日本の新劇の一つ、木谷茂生の「火山島」を訳し演出しました。一種の反戦的な劇で三島のもののような言葉とその表す意味がこみいって分かり難いと言った感じはなく、むしろ視覚に訴えるところまた音響効果にたよったりして、非常に全体的な演劇作りを要求される仕事で、遣り甲斐が大いにありました。

一年だけでお終になつてしまつたフェローシップの代わりに、研究助手としての手当てがその後の二年間貰える事になり、生活も一応安定して勉強と仕事に励みました。面白いことにこの研究助手の仕事が結果的に私の生涯の在り方を決定してくれました。と言うのは、私の日本語と英語の能力を見込んで、私を助手に使ってくれることになつたジョゼフ スコット教授は第二次世界大戦の後日本に進駐し、日本の古典演劇を知るようになり、特に能楽に興味をおぼえ、シャンペンの郷里に戻つてから、オハイオ州立大学で博士課程を修了しましたが、その博士論文は、能がどのようなコンヴェンション（上演様式の仕来り）をもつて、どのように上演されているかということをもとめたものでした。Joseph W. Scott "The Japanese Noh Play: The Essential Elements in its Theatre Art Form"（日本の能—その演劇芸術

としての基本的要素、オハイオ州立大学、一九四九年の博士論文。今にしてみれば、それ程奥深いものではありません

んが、その当時は能楽を本格的に研究した英語の本などはほとんどないし、彼の日本語能力は限られていましたから、日本語の専門書にたよることはできませんから、そこまでまとめるのも大変なことだったと思います。

スコット教授は、日本滞在中に求めたものもありましたが、帰ってからシカゴなどに出かけては買い求めて日本のものをいろいろ集めていて、特に能楽関係の日本語の専門書はだいぶ持っていました。これは彼の博士課程が終わったからのことですので、その役に立てるのではなくまた研究する機会が来れば使うつもりだったのだと思います。私の出現がその機会になったわけです。彼の希望は、二四〇の能を一つずつカードに入れて、その能に現れる登場人物、それぞれが使う面、衣装、小道具、舞台に置かれる大道具、囃子の使う楽器とかを一目瞭然にすることでした。これを終わらせるのに一年以上の月日がたちました。毎週二〇時間ずつ働き夏休みも授業がある間は働きました。第二段の仕事は私がカードに使った能の専門語を解説するための新しいセットのカード作りでした。こうした資料は日本語なら楽に手に入るのですが、英語でそういったものがなかった訳です。先生は演劇史を教えていましたので、学生が希望すればその連中にカードを使わせて、能はどのようなコンベンションのもとに舞台作りをしているかなどと言ったことを研究させていました。狂言について同じようなことはしませんでした。狂言の面、衣装、小道具など主なものについては、カードを作りました。

この仕事を通じて私は能狂言について大変基礎的な勉強をする事ができたわけです。然し、自分の博士論文に何を書こうかと言う問題にいたった折には、この私がさせられた仕事の結果を使うのではなく、何か自分でこれをしたら意味があると言ったことがしたいと思いました。能楽の研究をしているときに当然世阿弥の名に突き当たります。特にその幽玄についていろいろ書かれたものを読んでも、何となく分かったようなはつきりしないところがあり、当惑しました。また日本語で書かれたものを読んだりする時は何となく分かるわけですが、それを英語で説明すると大決と捉えようが無く困ることがしばしばありました。そんなところから世阿弥の幽玄観を論文に取り上げようと、大決

心をしました。

その当時発表されていたもので、私の論文に一番近い英文の研究書は、Zami on the No: A Study of 15th Century Japanese Dramatic Criticism”（世阿弥の能楽観—15世紀の日本演劇評論研究）で Richard N. McKinnon, フシントン大学教授がハーバード大学の博士課程の論文として、一九五一年に提出したものでした。マッキーノン教授の目的は、私が目指していた幽玄についての研究よりもっと広範囲な研究でしたから、幽玄についても言及されましたが当然限られておりました。

私の論文の第一章は観阿弥について、第二章は世阿弥、第三章は幽玄と言う言葉とその意味の変遷、第四章は世阿弥がどのように幽玄という言葉を使ったか、第五章は世阿弥の言う幽玄の究極的な意味は何かを説くというものでした。特に私が頼りにした研究書は第三章で西尾実の『中世的なものとその展開』（岩波書店・一九六一）、四、五章は能勢朝次の『世阿弥十六部集評釈』（岩波書店・一九六二）と『幽玄論』（河出書房・一九四四）で、『能楽源流考』（岩波書店・一九三八）も早期の能の変遷をうかがうには大事なものでした。最終的には二三五ページになる私としては大作で、一九六三—六四年に第三章をおわらし、その後、オハイオ州の州立ボーリンググリーン大学で教え始めたので、夏にしか論文にかかれなかったので、三夏かけてやっと一九六七年に書き終わりました。その間に六三年の八月にカナダの二世のリリーと結婚、六六年の九月には長男が生まれるというイヴェントがあったりして、真にあわただし三年間でした。六八年の六月には、次男が生まれました。

II. 米国大学で教職につく

A. Bowling Green State University, Bowling Green, Ohio (州立ボーリンググリーン大学, 1964—68)

この大学での私のした仕事は、もう一人前からいた人と二人で秋と春に四回上演する劇を半分に分け、一人が一学

期に一つずつ舞台装置を受持ち、時には照明音響効果、またさらに衣装もやることもあると言うことでした。クラスの方は舞台装置を教えました。カナダやテキサスの大学で経験したことが、大いに役立った訳です。新しい大学で新しい仕事を忙しくやったために、二年目になって胃潰瘍を患いました。幸いタバコをやめ、コーヒーも控えると言う節度のある生活に変えたのが功をそうし健康を取り戻しました。然し、いつも演出家の協力者と言う立場にいて、自分のやりたい事は二の次という舞台装置家の仕事に満足できず、博士論文の終わった六七年の夏にはここを抜け出したいと考えるようになりました。

幸い一九六八年の秋より州立のキャンザス大学に空きができ、そちらに移りました。ただそうする前の冬にボーリング、グリーンの田舎町で、私の日本古典演劇に傾倒することになる最も大事なことが起こりました。それはマッキーノン教授の発案で野村万蔵一家が教授に引率されて、アメリカ国内を狂言だけのプログラムをもって回るという歴史的なことがあったのです。その頃にはボーリング、グリーン大学にも日本についてのコースが少し教えられるようになっていて、また私もマッキーノン教授と面識がある間になっておりましたので、大学にお願いしてこの狂言団をお呼びすることになりました。私としても随分思い切ったことをしたのですが、これが縁と言うものでしょうか。お蔭様で野村家の皆様とお近きになれ、特に万作師とは同年輩と言うこともあり、話も合つて頼りになる方という印象をうけました。プログラムの最初の狂言は「附子」で、仕手をなさる万蔵師が橋掛かりのはずれに出られた一瞬、そのなんとも言われない雰囲気をもって立たれた姿とその太郎冠者の表情が、この「附子」が何であるかすつかり示しているように思え、私はすつかり魅されてしまい、その貴重な経験が私のそれ以後の生涯の道筋を決めることになりました。

ちよつと本筋からはずれますが、私はその頃野村家の方々とお酒の関係を全然知らなかったものですから、皆様を夕食にお呼びして、家内の手料理でおもてなしをしたのですが、私が出した酒の量が十分でなく、夕食後万蔵師はお

付の人と二人で寒い夜道を酒屋を求めて自分たちだけでられたのですが、小さい田舎の大学町ですからその当時そんな店はとうにしまっていて、ついに飲み足りないまま、お休みになられたと言う俳句をお作りになって、後で多分野村家の「狂言」に出されたのを覚えていますが、今それが見当たらず残念ながらここに引用することができません。私の失敗談です。

B. University of Kansas, Lawrence, Kansas (州立キャンザス大学、1968—2000)

このキャンザス大学は、バスケットボールの発祥地として有名ですが、演劇の方もボーリング、グリーン大学よりもずっと大きく私は一三人目の演劇部門の教授陣の一員となったわけです。その頃すでに始まっていた国際演劇の研究、それに関したコースも増やしたいと言った面もある進歩的な科でした。学生は総数二五〇〇〇ほどで、イリノイ大学よりは多少小さいことになりました。一年目は研究休暇を取った人の穴埋めと言うことで、二学期にわたる西洋演劇史を教たり、自分の専門になる東洋演劇など初めて教えるコースが三つあり、それに教えなれた舞台装置のクラスで、四つのクラスを死に物狂いで教えました。二年目(1969—70)からは西洋演劇史と舞台装置は返上し、日本古典劇における演技様式という新しいクラスを足すことになりました。また木下順二の「夕鶴」と「赤い陣場織」の二本立てのプロダクションを演出することになりました。劇上演のプログラムは前年に決めるので、一九六九年の夏に勉強した狂言などを演出することは不可能でした。こうして私のアジア演劇特に日本古典演劇を専攻するという立場を作り始めることになりました。その仕事の内容、当時の米国における日本演劇研究上演、私の古典演劇修業過程などについては、章を改めて記述させていただきます。